



---

## 北九州市立大学 サステナビリティレポート

---



北九州市立大学  
サステナビリティレポート2025

2026年3月  
サステナビリティプロモート・タスクフォース



## — 目 次 —

・ 目次	1
・ 学長メッセージ	2
・ SDGs 宣言	3
・ ダイバーシティ宣言	4
・ 環境負荷低減の取組み	5
・ 学生レポート／サステナビリティへの挑戦	8
・ 本学のサステナビリティへの取組み	22
・ THE インパクトランキング	31
・ 活動する学生からのメッセージ	33
・ 活動する教員からのメッセージ	35
・ 北九州市立大学 4 つのビジョン	39
・ 組織	40

## サステナビリティレポート 2025 に寄せて

---

北九州市立大学は、「地域と歩む」「環境を育む」「世界とつながる」「情報で創る」を四本柱とし、SDGs 宣言を 2025 年 4 月に発信いたしました。地域課題の解決に取り組む人材育成、環境技術の研究・産学連携、グローバルな視点を身につけた国際人の育成、情報を活かした社会課題への挑戦という4つのビジョンを掲げています。

また、ダイバーシティ宣言（2022 年 1 月）では、国籍・障がい・性別・SOGI・年齢・働き方などの多様性を最大限尊重し、誰一人として不当な扱いを受けない共生の場づくりを推進しています。これらの宣言を土台に、学内外で実践的な教育・研究活動を展開しています。

具体的には、国連アカデミック・インパクトへの加盟（2019 年）、SDG 大学連携プラットフォーム加入（2020 年）を通じ、国際的な持続可能性推進の枠組みに参画しました。また、SDGs セミナーやカードゲーム、模擬国連大会などの学内外イベントを継続開催し、学生・教職員の学びと気づきを醸成しています。

環境技術研究所や地域戦略研究所では、集成材・泡消火剤・水素エネルギーなど環境配慮型技術の開発に注力し、地域共生教育センター（421Lab.）による子ども食堂支援や防災、美化活動など地域に根ざした学生主体の実践活動が活発に行われています。

本学は、これらの取組を通じて持続可能な社会の実現に貢献するとともに、多様な個性を尊重し、誰もが生き生きと学び働くキャンパスを目指します。今後も大学が持つ知と技を地域・社会と連携しながら深化させ、次世代の担い手を育み、グローバルな価値創造へと挑戦し続けてまいります。

2026 年 3 月

北九州市立大学  
学長 柳井 雅人



# 北九州市立大学 SDGs 宣言

北九州市立大学は、その社会的存在としての役割を果たすため、持続可能な開発目標 SDGs (Sustainable Development Goals) の 17 の目標の達成に向けて、本学の4つのビジョンを基礎とし、以下のように持続可能な発展のための活動に取り組むことを宣言します：

## 地域と歩む



地域の地(知)の拠点として、持続可能な地域の発展に貢献するとともに、地域課題に取り組む人間の育成を目指します。

## 環境を育む



環境関連技術の研究開発、産業界との連携、環境教育などを通じて、地域及び地球規模の環境問題の解決と、それに挑む人間の育成を目指します。

## 世界(地球)とつながる



グローバルな視点を持ち、世界規模の課題を考え、行動する人間の育成を目指します。

## 情報で創る



情報を活かして、新たな価値を創造し、変化していく地域や社会の課題を解決することのできる人間の育成を目指します。

## 多様性を認め合う



学生、教職員をはじめとする大学を構成する人間集団が、多様性を持つ集団であることをあらためて認識し、誰ひとりとして不当な取り扱いがなされない組織であることを確認します。学びの場として、また、働く場としての快適性を向上させるため、あわせてダイバーシティ宣言を行います。

2025年4月1日  
北九州市立大学 学長

## 北九州市立大学 ダイバーシティ宣言

---

北九州市立大学は、地域の教育・研究・地域活動の拠点として、学生、教職員、地域住民をはじめとする、大学にかかわるすべての人々の多様性や個性を尊重し、ダイバーシティの推進に取り組むことを宣言します。

ダイバーシティを推進するにあたり重要な大前提は、人は誰もがマイノリティーになり得るということです。

この基本的大前提をもとに、本学に属するすべての学生・教職員が国籍、障害、性別や SOGI（性的指向・性自認）、年齢、キャリア（働き方）等にかかわらず、あらゆる多様性を積極的に受け入れ尊重し、安心して個性と能力を最大限に発揮できる環境の整備に向けて取り組みます。

その結果、誰もが不当な扱いを受けることのないような組織作りを心がけます。一人ひとりが責任を果たし、お互いの人権を尊重し合い、誰一人取り残すことなく、みんなで協力し合える差別のない共生の場（学び、働き、それぞれの個性を伸ばせる場）を共に目指しましょう。

2022年1月6日  
北九州市立大学 学長

# 北九州市立大学における SDGs 貢献の取り組み

---

地域戦略研究所 SDGs 推進部門長  
教授 眞鍋 和博

北九州市立大学では、SDGs の理念に基づき、環境負荷低減を目指した取り組みを進めています。本学の中期計画でも「SDGs への貢献」の取組みの一つとして「電気・ガス・水道や廃棄物処理等における使用料等の経年変化について学内構成員に公開するなど、キャンパスの環境負荷の見える化を促進するとともに、SDGs に関連する学内向けセミナー等を開催する」と明記されています。その取り組みにおいて特徴的なのは、学生の発案によって電気・ガス・水道の使用量や廃棄物量を「見える化」し、学内に掲示する活動が始まったことです。過去 3 年間のデータを収集し、地域貢献係と連携して学生に直接共有することで、省エネ意識の向上を図っています。

エネルギー削減では、LED 照明の導入が大きな成果を上げています。本館の上層階では授業時間外の消灯を徹底し、防災センターと協力した運用も実施中です。体育館の LED 化は 4 ～ 5 年前に完了し、全体的な電力使用量は減少傾向にあります。一方、ガスは体育館への空調導入で一部増加しましたが、前年を下回る水準を目指して管理されています。

廃棄物対策では、瓶・缶・紙類の資源回収を学内で実施し、段ボールは週 1 回収する体制を整えています。ただし、一般ゴミの分別は難しく、プラスチック削減が課題です。紙の排出量はペーパーレス化で減少傾向にあるものの、過去の蓄積分の処理が影響し一定量が発生しています。

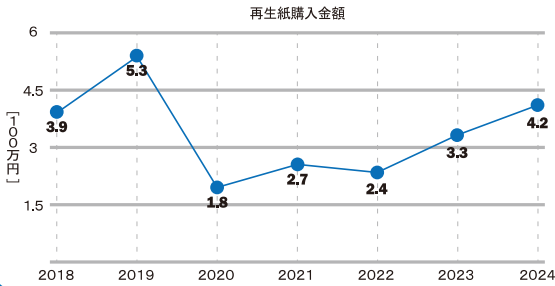
大学として明確な数値目標は設けていませんが、コスト削減と環境配慮を両立させる自主的な取り組みが進行中です。今後は LED 化のさらなる推進やカーボンニュートラルへの対応が求められ、教育環境を維持しつつ持続可能なキャンパスづくりを目指す姿勢が際立っています。

# 北九大の環境負荷を 考えてみませんか？

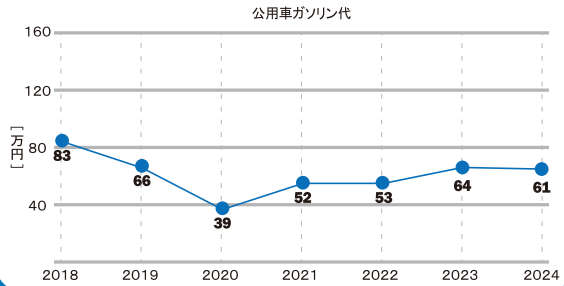
## 光熱水費や廃棄物量等の経年変化



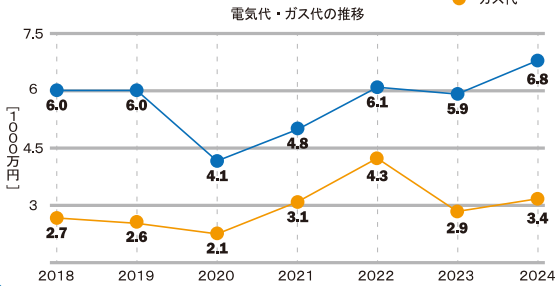
★大学が購入した紙の量の変化



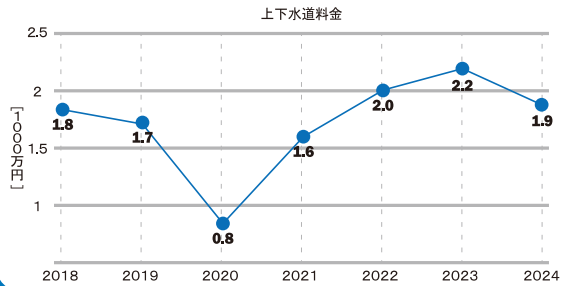
★大学公用車ガソリン代の変化



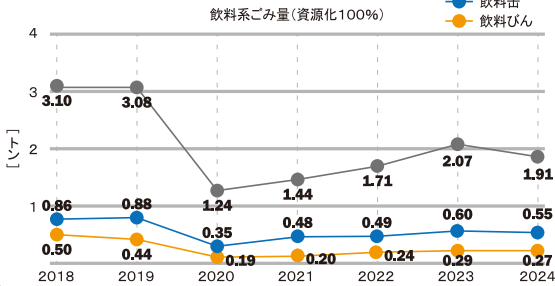
★北方キャンパスの電気代・ガス代



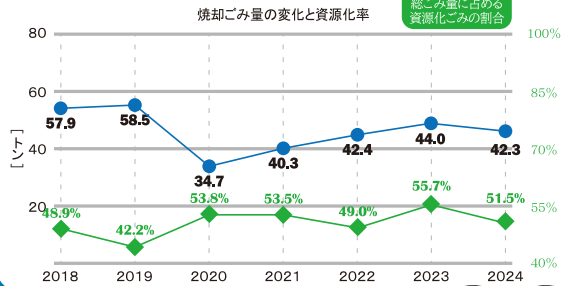
★北方キャンパスの上下水道料金



★大学の飲料系ごみ量



★北方キャンパス焼却ごみの量と資源化率



2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、長期間にわたり入構制限の措置がとられており、いずれの数値も軒並み減少している。



### 環境を育む

(2022年1月6日「北九州市立大学SDGs宣言」より抜粋)



環境関連技術の研究開発、産業界との連携、環境教育などを通じて、地域及び地球規模の環境問題の解決と、それに挑む人間の育成を目指します。

<https://www.kitakyu-u.ac.jp/department/education/sdgs/index.html>

掲示：北九州市立大学 事務局 地域貢献課地域貢献係(第4期中間計画履行のため、過年の掲示認可 / 2025年7月1日～2026年6月30日)

# CO2 排出低減に向けた検討

環境技術研究所カーボンニュートラル推進部門長  
教授 松本 亨

2024年4月に、環境技術研究所カーボンニュートラル(CN)推進部門が設置された。主な役割は学内のCN研究情報の集約と外部との連携であるが、キャンパスのゼロカーボン化検討も役割の1つである。昨年度より検討WGを立ち上げ、検討を進めている。わが国が国際的に表明しているGHG(温室効果ガス)の削減目標は、2013年度比で2030年度46%削減、2035年度60%削減、2040年度73%削減、2050年度実質ゼロである。大学等の建築物が含まれる業務その他部門は、2030年度に51%の削減率が求められている。脱炭素ロードマップを公表している大学は、2050年度までのCN達成を目指すとしているところが多いが、2040年度や2030年のようにより野心的なCN達成時期を公表している大学もある。

図1, 2は、ひびきのキャンパスN棟とS棟の年間電力消費量である1)。統計的な手法を用いて、ベース分(夜間の最低負荷)と活動分(日中の負荷増加分)に分割した。これにより、両棟の電力消費構造が異なることがわかる。さらにエネルギー消費機器別に分割することを試みているが、それがわかると対策の導入効果を推計することが可能となる。

GHGプロトコルのScope1(直接排出量)、Scope2(エネルギー起源間接排出量)の他、Scope3(その他の間接排出量)の算定・報告をしている大学もある。CN推進部門では現在、Scope3のカテゴリ1(購入した製品・サービス)、カテゴリ3(Scope1、2に含まれない燃料及びエネルギー関連活動)、カテゴリ5(事業から出る廃棄物)、カテゴリ6(出張)、カテゴリ7(雇用者の通勤)の排出量の推計を試みている。

1) 酒井遥士・藤山淳史・松本 亨：大学キャンパスにおける講義棟・実験棟の電力消費構造の分析：実測データと設計計算を併用した推計、土木学会西部支部研究発表会講演概要集、2026(印刷中)

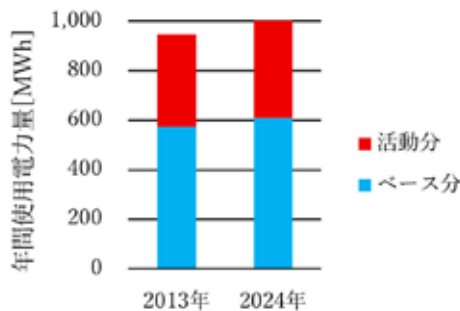


図1 N棟における年間電力消費特性

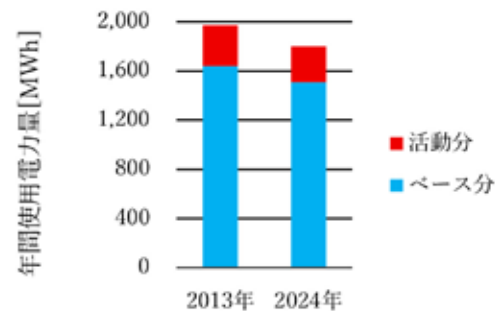


図2 S棟における年間電力消費特性

学生を中心とした  
サステナビリティへの取組み

# もったいないから始まる 循環型プロジェクト

地域共生教育センター『北九大もったいないプロジェクト』

12 つくる責任  
つかう責任



11 住み続けられる  
まちづくりを



15 陸の豊かさも  
守ろう



17 パートナリシップで  
目標を達成しよう



北九州市立大学の地域共生教育センター（通称：421Lab.）に所属する「北九大もったいないプロジェクト」は、大学内にある「もったいない」を減らすことを目的に、学生主体で多様な活動を展開しています。大学内の放置傘を回収し、活用する「もったいない かさ」の設置や、北九州市立大学内の生協ショップ等で販売されているお弁当容器の回収活動は、ゴミ分別やリサイクル意識の向上（goal:12）に繋がっています。さらに、回収したお弁当容器は換金され、子ども食堂への寄付（goal:11）にも活用されており、環境と福祉の面から地域に貢献する仕組みになっています。

また、大学の敷地内にある「もったいないガーデン」では、生ごみをコンポストに投入してできた堆肥を利用し、花や野菜を育てることで、資源循環や地域緑化（goal:12・goal:15）を実現しています。加えて、教室や廊下の消灯を呼びかける活動や、大学創立80周年を記念したリサイクル募金「きしゃぼん」などの取り組みも行われています。

今年度からは、大英産業株式会社と連携し、大学敷地内で伐採された木を再活用する新たなプロジェクトもスタートしました。学生の創意工夫と大学や地域との連携（goal:17）が、プロジェクトの活動の幅を大きく広げています。

今後は、多様な人々とのつながりを育みながら、人員確保や定例活動等の課題解決に取り組み、活動の継続性と発展性を高めていくことを目指します。

法学部2年 林 優里



もったいないガーデンでの活動の様子



お弁当容器回収



もったいない かさ

# SDGsについて教育を通して推進する 眞鍋ゼミでの活動

地域創生学群『眞鍋ゼミ』

4 質の高い教育を  
みんなに



北九州市立大学地域創生学群の中の地域創生コースにある眞鍋ゼミでは教育を取り巻く様々な問題について考え、授業の企画、実践をしています。教育は人間の活動における原点であり、将来にわたって持続可能な社会ができるような教育とはどうあるべきかについて考えることを目的としています。さらに、質の高い教育をみんなに（goal4）を実現するものでもあります。

このゼミでは、生徒達は主に高校班、小中校班、推進班の3つの班に分かれて活動を行っています。高校班では「総合的な探求の時間」に授業を行う活動、小中校班では総合での授業に加えて、リーダーシッププログラムのサポートをする活動を、推進班は企業の方にSDGsを理解してもらうためのイベントを中心に活動しています。これらの活動をするにあたって、授業中に全員でSDGsについて学ぶインプットの時間を設けたり、多数のクラスに授業する際には全員で行ったりするなど全体で協力して活動を行っています。

また、ゼミでの活動を通して、生徒達が将来、社会に出たときに自ら課題を見つけ考え楽しみながら仕事をするような考え方や力を身に付けることも目的の一つとしています。そのため生徒達は常に生徒自身で目標を設定し、その目標を達成するための課題を見つけ、改善策を考えながら楽しんで取り組んでいます。

今後も、教育という分野を通して、地域や世の中が変化するようなSDGsを理解してもらう活動を行っていきます。

外国語学部1年 山本 美緒



高等学校での総合的な探求の時間



中学生向けリーダーシップ研修



企業のサステナビリティを考える

# 学生と地域でつくる 防犯・防災の安全循環

地域共生教育センター『防犯・防災プロジェクト(MATE's)』



北九州市立大学の地域共生教育センター(421Lab.)で活動する「MATE's」は、防災(goal:13)と防犯(goal:16)に関する意識を地域に広めることを目的に、子どもや市民に向けた啓発活動を行っています。MATE'sは、防犯防災の知識を、わかりやすく伝えることを重視し、地域における安全の初期啓発という重要な役割を担っています。

主な活動として、子ども向けの防犯・防災講座を実施しています。これらは、北九州市内のNPO、警察、行政、自衛隊など様々な組織との協働によって行われています(goal:17)。このような連携は、地域全体で安全への意識を育む仕組みづくりにつながっています。大学生は子どもたちと年齢が近いため、子どもたちが緊張せず話を聞いてくれることも、学生が啓発を行う上での利点です。学生が地域社会に参加し、世代を超えた安全の循環を生み出している点もMATE'sの大きな特徴です。

2025年度は、活動を共にするメンバーが増加したため、活動を広げる年となりました。今後は、これまでの成果を精査し、活動の目的と照らし合わせながら、より質の高い防災防犯の取り組みを進める方針です。安全への意識を広げる取り組みを、より持続可能な形へと育てていくことが目指されています。MATE'sの活動は、地域社会に安全を根付かせ、子どもたちが未来へ継承する力として、住みやすいまちづくりに貢献していきます(goal:11)。

地域創生学群 1年 後呂 綾乃  
外国語学部 1年 吉本 彩人



防犯マップの作成



子どもたちに防犯防災を教える様子



MATE'sメンバーのみなさん

# 地域から広げる平和学習の取り組み

地域共生教育センター『みらいピースプロジェクト』



北九州市立大学の地域共生教育センター(421Lab.)に所属する「みらいピースプロジェクト」は、平和学習を通じて次世代に平和の価値を継承することを目的に活動しています。北九州・小倉は、かつて原爆投下予定地であったという歴史的背景を持っています。

一方で、現在の小中高生の間では平和に対する意識の希薄化が課題となっており、そうした危機感を背景に本プロジェクトは立ち上げられました。主な活動として、小学校での平和学習の実施や、平和関係のイベントへの協力や参加、SDGs 修学旅行で来学した中学生への平和学習の支援などを行っています(goal:4,11,16)。

今年度は、葛原小学校や西小倉小学校での平和学習をはじめ、若松の忠霊塔イベント運営への参加、広島研修の実施など、多様な取り組みを展開しました。特に、学内外の協力を得て約3000羽の千羽鶴を折り、広島へ届けた「千羽鶴プロジェクト」は、今年度初の試みとして印象的な活動となりました(goal:4,16)。子どもたちにとって重いテーマである「平和」を、いかに関心を持ってもらうかが課題となるため、平和学習の導入方法など試行錯誤を重ねています。

今後は、オンラインを活用した全国規模での平和学習の展開や、平和をテーマとした新たな交流の場づくりにも取り組んでいく予定です(goal:16)。本学の学生主体の実践を通じ、平和の意義を地域から全国へと広げていくことが期待されています。

文学部 1年 玉井 七瀬  
向手 美優



平和学習



千羽鶴プロジェクト



広島研修

# 学術的知見を活かした地域創生の実践



## 地域創生学群『佐藤ゼミ』

佐藤ゼミは、北九州市立大学において、「地域の人々をより良い方向へ導くにはどのような仕組みが有効か」という問いを軸に、地域創生に関する実践的な学びを行っているゼミです。心理学、デザイン、行動経済学、マーケティング、情報技術など、複数の学問分野の知見を組み合わせながら、人の行動変容を促す仕組みづくりに取り組んでいます。

これまでの取り組みの一つに、防災分野の専門家と連携した防災カードゲームの実践があります。本活動は、災害が比較的少ない北九州地域において、防災意識を事後対応ではなく「防災予防」として日常的に定着させることを目的としています。防災ゲームが防災予防に効果を持つことは、既存の心理学実験によるデータでも示されており、佐藤ゼミではこうした学術的知見を踏まえた実践を行っています。(goal:4,11)

また、魚町みらい広場を舞台とした活動や、ゼミ生による古着出店などを通じて、地域のにぎわい創出や資金循環といった持続可能性にも着目しています。(goal:11)

一方で、新たな活動を進める際には、学内外の理解や運営資金の確保といった課題も存在しており、やりがい搾取に陥らないための仕組みづくりや、マネタイズの重要性についても検討が重ねられています。このような佐藤ゼミの活動は、教育・研究・社会貢献を有機的に結びつけ、地域とともに未来を創る北九州市立大学の姿勢を示す実践例の一つです。



防災カードゲーム



古着出店

文学部 1年 玉井 七瀬  
向手 美優

# 地域の子どもたちと 共に楽しく学ぶプロジェクト

## 地域共生教育センター『こども知育プロジェクト』



北九州市立大学には、学生の主体的な地域貢献活動をサポートする地域共生教育センター(通称:421Lab.)があり、今年度は19の学生プロジェクトが活動しております。「こども知育プロジェクト」は、貴船Y・Y児童クラブにおいて、楽しく学びながら子どもたちと接することで小学生への居場所づくりと学習支援を行う取り組みをしています。

学童での定期的な活動(月3回)や、子ども向け地域イベントへの参加を通して、遊びを取り入れた学習支援や交流の場を提供してきました。学童での活動内容としては、ボウリングや輪投げ、キャッチボール、折り紙、縄跳び、ジェンガなど、年齢や発達段階に応じた多様な学びを実施しました。子ども向け地域イベントではボウリングや輪投げなど複数のブースを設けることで、子どもたちが何度も挑戦できる環境を整え、楽しみながら主体的に参加できる工夫を行いました。

活動を通して、子どもとの関わり方やコミュニケーション力、臨機応変な対応力が身につく、子どもの実態や多様な背景への理解を深める貴重な経験になりました。

今後は、学童での定期イベントの開催を継続するとともに、子ども関連イベントへの参加をさらに増やし、より多くの子どもたちと学び合える場を広げていきたいと考えています。



ボウリング



子どもたちの交流

経済学部 1年 水津 真尋

# 買い物でできる身近な国際協力により、フェアトレードを広める取り組み

『フェアトレード推進サークルEtica』



北九州市立大学には、「フェアトレード推進サークル Etica」という北九州市立大学の学生が中心となり企画・運営しているフェアトレードの学生団体があります。このサークルはフェアトレードについて興味を持つ人を年齢問わず増やす事を目的として、フェアトレードを買い物という形で広める活動に取り組んでいます。

活動内容としては、食料品から雑貨までのフェアトレード商品を北方キャンパス内で週に2回ワゴンでショップを開いたり、校内のみならず北九州市のエコイベントなどにも参加し販売しています。普段目にする事ない商品が多くあり、値段は少し張りますが無添加であったりと品質が良い商品を手にする事ができます。

また、商品の販売だけではなくフェアトレードをはじめエシカル消費、フードロスなど、国際社会問題に関する映画の上映も行なっています。上映後には意見交換を行い考えを深める事ができます。

これらの活動によりフェアトレードを知り商品を買ってもらう事で、人や国の不平等 (goal: 10) や貧困 (goal: 1) を無くす事を考えるきっかけとなり、全ての人への健康と福祉 (goal: 3) や平和と公正 (goal: 16) を実現する事に繋がります。

そして、活動により得たお金は寄付先を話し合いの元で決め寄付しており、既に能登半島や子ども食堂への寄付を行っております。今後はより多くの方がショップに来てもらえるようにコロナ禍で中止していた活動を再開したり、学外の活動も活発にしていく事を目標にしています。

経済学部 1年 下田 美沙希



ワゴンでの販売の写真



販売しているフェアトレード雑貨



販売しているフェアトレード食品

# 観光とイベントで学ぶ地域連携の実践

地域創生学群『南ゼミ』



南ゼミでは、観光振興や大規模イベントを通じて地域社会の活性化に貢献することを目的に、行政や民間企業と連携した実践的な活動に取り組んでいます。TGC北九州やポップカルチャーフェスティバルをはじめとする各種イベントの運営支援や、観光資源の魅力を発信する情報発信活動に学生が主体的に関わることで、机上の学びにとどまらない実践的な教育の場を創出しています。現場では、イベント関係者や情報発信の専門家から直接助言や指導を受ける機会も多く、学生が自ら考え、課題を発見し、改善策を模索する力を養っています (goal:4)。

また、イベント開催や観光誘客による交流人口の増加は、地域経済の活性化や関連産業の振興につながり、持続的な経済成長に寄与する取り組みとなっています (goal:8)。加えて、地域の文化や歴史、既存資源を活用したイベント運営や情報発信は、地域への理解や愛着を深める契機となり、住み続けられるまちづくりの推進にも貢献しています (goal:11)。

さらに、行政・民間企業・大学が対等な立場で協働し、事業内容や今後の展望について意見交換を行うことで、協働による地域創生を実践しています (goal:17)。

今後も、地域と連携した学びを通じて、サステナブルな社会の実現に貢献する活動を継続していきます。

文学部 1年 玉井 七瀬  
向手 美優



北九州市公式観光Instagram情報発信活動



「関門ノスタルジック海峽」ブース

# 一人暮らし大学生の食生活を支える フードパントリー

ぶくまる北方



北九州市立大学の学生が運営する学生団体「ぶくまる北方」は、一人暮らしをする大学生の食費負担を少しでも軽減 (goal: 1) し、食生活の向上を図る (goal: 2) ことを目的に、北九州市立大学の学生向けに無料のフードパントリーを行っています。物価高騰の影響で生活が不安定になりやすい一人暮らしの学生にとって、気軽に利用できる支援の場として、市民センターを中心に取り組みを進めています。

2025年度は、フードバンクから提供された食品を活用 (goal: 12) し、定員 25 人の学生を対象に定期的な配布を行ってきました。レトルト食品や野菜、お菓子など、日常の食事に役立つ品目を揃え、必要とする学生が利用しやすい形で提供しています。

活動は、フードバンクをはじめとした地域の協力 (goal: 17) によって支えられており、安定した食品提供の体制が整えられています。また、市民センターを会場とした取り組みを通じて、地域と学生が自然と関わる機会も生まれています。

今後は、より多くの学生に食品を届けられるよう、配布人数の拡大に加えて、大学の中庭を活用した配布を行うなど、活動の規模を広げていく予定です。また、これまでと同様に定期的なフードパントリーの運営を継続することで、一人暮らしの大学生が安心して日々の食生活を送れるよう、今後も食糧支援を続けていきます。



食品受け渡しの様子



フードバンクから提供された食品



ぶくまる北方のみなさん

地域創生学群 1年 後呂 綾乃  
外国語学部 1年 吉本 彩人

# 生理の貧困問題の改善、解決を目指す

地域共生教育センター『生理の貧困プロジェクト』



北九州市立大学にある 421Lab. には生理の貧困プロジェクトが所属しています。このプロジェクトは生理の貧困問題 (経済的な貧困で生理用品が買えないこと、生理に関する知識を身につけられないこと) の改善解決を目指すプロジェクトです。

具体的な取り組みとして「北九大生理の日イベント」、「子ども食堂コラボ」、「クリスマスドライブ」の3つが挙げられました。

1つ目の「北九大生理の日イベント」は、北九大生の生理の貧困プロジェクトの認知度の向上と、生理の貧困について知ってもらうことが目的となっています。6月23日を北九大生理の日と決め、今年度は多くの人に参加しやすいよう、短冊に願い事を書くイベントを実施しました。

2つ目の「子ども食堂コラボ」では生理は恥ずかしいことでは無いという認識を広げることが目標になっています。小学生を対象に昨年度は性被害とプライベートゾーン、今年度は多様性についてお話をしました。

3つ目の「クリスマスドライブ」は、まず学校内の生理用品回収ボックスで生理用品の寄付を頂き、その後学校内のトイレで配布するという活動です。この活動は生理の貧困プロジェクトの中で最も感謝の声を頂き、継続している活動になっています。

このような取り組みを通じて、少しずつ学内の方たちに生理の貧困プロジェクトの存在や生理の貧困がどのようなものかを認識してもらっています。今後は環境への負荷が低い繰り返し使用可能なものを普及させていけるよう、様々なイベントや活動を行っていきます。

経済学部 1年 二宮 来実



北九大生理の日イベント



子ども食堂コラボ



クリスマスドライブ

# 「フットパス」を通じ 地域のありのままを楽しむ

地域創生学群『廣川ゼミ』



廣川ゼミでは、行橋市、直方市、北九州市(戸畑区・若松区)を主な活動地域とし、「フットパス」というイギリス発祥の観光手法を通じて、持続可能な地域共創に貢献しています。フットパスとは「交流型歩く観光まちづくり」の手法です。学生と地域住民が共に地域を歩き、日常に埋もれた価値を再発見(goal:4)し、交流を通してありのままの地域を楽しむことを目的としています。

この活動の最大の価値は、地域住民の意識変容(シビックプライドの醸成)にあります。活動を通じ、自分たちの地域に自信や誇り(シビックプライド)を持つことで、自分のまちの魅力の発信者になっていきます。これにより、まちづくりの担い手が増加(goal:11)し、持続可能な地域コミュニティの基盤を強化しています。

さらに、この意識変容は具体的な経済活動へと発展しています。シビックプライドを持った地域の方々たちが縁側カフェを開く(goal:8)など、主体的なコミュニティビジネスが生まれています。

2025年度は、学生と地域住民の協働により、梅拾いフットパス、干し柿フットパス、夜カフェ、酔いどれフットパスなどの実習をしました。地域にある施設や資源を広く活用(goal:12)し、新たな魅力の発見を楽しんでいます。

廣川ゼミは、学生が地域の「起爆剤」となり、地域住民の方々と一緒に地域を楽しみ、共に成長できる地域づくりを目指しています。

地域創生学群 1年 後呂 綾乃  
外国語学部 1年 吉本 彩人



フットパスを歩く様子



干し柿フットパスの準備



秋の紅葉フットパス

# 地域とつながる まち美化清掃プロジェクト

地域共生教育センター『地域クリーンアッププロジェクト』



北九州市立大学の地域共生教育センター(通称:421Lab.)に所属する「地域クリーンアッププロジェクト」は、地域の方々とアットホームな雰囲気の中で清掃活動を行うことを目的に、北九州市立大学周辺で定期的にごみ拾い活動を実施しています。

活動は、北方周辺を中心に、月に2回(第2・第4水曜日)NPO法人greenbirdの北方チームとして、地域と学生が自然につながる活動を行っています。さらに、ハロウィン清掃といった仮装をして清掃活動を行うなど、参加者が楽しく交流しながらごみ拾いを行えるイベントも実施しています。学生と地域住民が協力しながら、まちをきれいにするこの活動は、地域の景観美化、地域コミュニティの活性化(goal:11)に貢献しています。

さらに、ごみの分別やリサイクルに対する意識の向上(goal:12)や、町中から川や海へのごみの流出を防ぐことにもつながるため、海洋ごみの削減(goal:14)にも貢献しています。加えて、路上や緑地に放置されたごみを減らすことは、土壌汚染の防止や動植物の生息環境を守ることにもつながっています(goal:15)。

今後は、「清掃=大変」ではなく「清掃=楽しい」と感じてもらえるようなイベントの企画にも力を入れ、誰もが気軽に参加できる活動になるように取り組んでいきます。清掃をきっかけに人と人がつながり、地域の中に新たな交流の輪が広がっていくことを大切にしながら、活動を続けていきます。

法学部2年 林 優里



清掃活動の様子①



清掃活動の様子②



清掃活動の様子③

# 北九州市立大学の学生による 子ども食堂サポートプロジェクト

地域共生教育センター『子ども食堂応援プロジェクト』



北九州市立大学には、学生が主体となって地域貢献活動を行う地域共生教育センター（421Lab.）があり、中でも『子ども食堂応援プロジェクト』では、北九州市内の四つの子ども食堂の運営サポートに取り組んでいます。学生たちは、子ども達のお世話や学習支援、遊びの見守りに加え、食事づくり (goal:2) やイベント企画、企画オファーへの対応など、幅広い活動を行っています。これらの活動は、子ども達の個食の解消や安心して過ごせる居場所づくり (goal:3) につながり、学校や家庭に続く『第三の居場所』となることを目指しています。

特に「まるっと食堂」では、「貧困家庭向け」というネガティブなイメージを払拭し、誰でも来られる地域交流の場を大切にしています。また、生理の貧困 (goal:1,5) について子ども達に分かりやすく伝える機会も設けています。

こうした取り組みは、SDGs の目標に深く関わっています。活動情報は Instagram「まるっと食堂」や市のセンター掲示を通して発信され、地域全体へと広がっています。学生たちは場所をお借りしながら月1回の活動を継続し、子ども達と地域のつながりを今後も育んでいきます。

外国語学部英米学科1年 武田 彩良



子ども食堂での食事の様子



かるたで遊ぶ様子



小学生に勉強を教えている様子

# 世界から食の格差をなくす

地域共生教育センター『TFT×KitaQ univ.プロジェクト』



北九州市立大学にある地域共生教育センター（通称：421Lab.）に TFT × KitaQ univ.PJ が所属しています。この団体は、日本や世界規模で食の問題に取り組む団体である TFT の北九大支部として活動しています。学内にとどまらず、学外や日本以外の国の人々へ食事を届ける活動を行っています。

主な活動内容に、食堂と共同でフェアメニューを考案し、実際に販売する「TFTフェア」があります。

また、LEARNING SPACE CANDLE で行われるいんどりフェスにて出店し、メンバーが考えたメニューを販売しています。これらの売り上げによる売り上げの一部は発展途上国の学校の給食費として寄付しています。今年度の上半期で実施されたマルシェでは、4000 円が寄付されました。(Goal:1)

また、SNS に「おにぎりアクション」とハッシュタグをつけて投稿することで、協賛企業様から 5 食分の給食が寄付されるという活動も行っています。この活動は、きらめき上の原様で行われたキラフェスでも実施され、SNS 投稿でおにぎりを半額で販売するというキャンペーンも併せて実施しました。おにぎりアクションによって、500 食を売り上げ、本部・支部合わせて約 12 万食分の給食を寄付することを達成しました。(Goal:2)

こういった活動を通じて、地域の方々の食への関心を高めたり、国同士の垣根を超えた食支援を行ったりしています。「1 食分の支援 = 1 つの笑顔を届ける」をスローガンに、SDGs 目標でもある、世界の貧困や飢餓をなくすことを目指しています。

法学部 2 年 大田 ころろ



きらフェスでの販売の様子



実際に販売したおにぎり



企業様から頂いた海苔とお米の配布

# 地域と学生をつなぐ 421Lab.のSDGs実践

地域共生教育センター学生運営スタッフ



地域共生教育センター（通称：421Lab.）は、「地域」と「大学」をつなぐ役割を担い、学生が主体となって地域課題に向き合う場を提供しています。地域には多様な人々が暮らしており、その中で生じる課題やニーズに対し、学生たちは地域の方々と協働しながら解決に向けた取り組みを行っています。

現在 421Lab. では、SDGs の目標に関連した 19 のプロジェクト型活動が展開されており、学生はそれぞれの関心や学びに応じて活動に参加しています。これらの活動は、質の高い学びの機会を提供する点で SDGs 目標 4「質の高い教育をみんなに」に貢献し、活動を通じて得た学びは、振り返る機会を設けることで、学生 1 人 1 人が自身の成長を実感できる環境づくりにも力を入れています。

また、北九州市は「SDGs 未来都市」として全国から注目を集めており SDGs 修学旅行の受入れも行われています。421Lab. では、単なる見学にとどまらない体験型ワークショップを実施し、地域の魅力や課題を実感できる学びの場を創出してきました。

こうした取り組みは、目標 11「住み続けられるまちづくりを」にも繋がっています。さらに、学生と地域、大学が対等な立場で関わる協働の形は、目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」の実践例といえます。

421Lab. の活動は、学生の成長と地域社会への還元を両立させる、持続可能な取り組みを進めています。

地域創生学群 2 年 西村 陽菜



SDGs 修学旅行



マナー講座



大学訪問

## SDGsの輪を広げる共創プロジェクト

地域共生教育センター『KITAQキャンパスSDGs』



北九州市立大学の地域共生教育センター（通称：421Lab.）に所属する「KITAQ キャンパス SDGs」は、主に大学内の SDGs 文化の醸成に取り組んでいます。

今年度は、学内にとどまらず、学外にも活動を展開しました。まず、紙・プラスチック・電気の使用量削減を目的とした北方・ひびきの連携プロジェクト「北九大エコのたね」を立ち上げました。株式会社タカギのご協力のもと、ひびきのキャンパスに浄水ウォーターサーバーを新たに設置し、北方キャンパスとあわせて、ペットボトルゴミの削減とマイボトル持参の促進に取り組んでいます。浄水ウォーターサーバーの清掃等の運用も学生が担い、安全で安心な水を継続的に利用者へ提供できるよう努めています（goal:6）。

また、KAMIKURU に参画し、大学内で回収した古紙をアップサイクルしていただく活動も開始しました。限りある資源を有効に活用することで、紙の循環や環境負荷の低減を目指しています（goal:12）。この古紙回収にあわせて大英産業株式会社と協働し、端材を活用した古紙回収ボックスの制作も行いました（goal:13）。

さらに、株式会社タカギや KAMIKURU と協働して北九州エコライフステージ 2025 にブース出展したほか学内外でワークショップも実施し、学生だけでなく市民の方々にも環境問題や ESD への関心を高めていただけるよう努めました。（goal:17）

今後も、多様な人々とのつながりを大切にしながら、持続可能な社会の実現に向けて課題解決に取り組んでいきます。

経済学部 1 年 木村 美遥



プロジェクトで設置した浄水ウォーターサーバー



大英産業株式会社の方と古紙回収ボックスの作成



エコライフステージでの活動

# 国際開発プロジェクト Thaksinaを通じたタイとの持続可能な地域づくり

地域共生教育センター『国際開発プロジェクト Thaksina』



国際開発プロジェクト Thaksina は、日本とタイをつなぐ架け橋となることを目的とした国際協力プロジェクトです。本プロジェクトでは、食・文化・観光の分野から地域課題の解決を目的に取り組んでいます。

主な活動の1つは、タイの人々や現地のムスリムの人々と協力した食品開発です。ムスリムの人々は宗教上の理由から豚肉を食べることができないため、株式会社ヤギシタと連携し大豆ミートや鶏肉を使用したソーセージの開発を行っています。(goal:1) 完成した商品はタイを主な市場として展開することを目指しており、試食会を実施しながら改良を重ねています。また、ひびきのキャンパスとも連携し産学連携の形で活動を進めています。(goal:2)

2つ目の活動は、タイの学生を日本に招いた文化交流です。年に一度協定を結んでいるタクシン大学の学生が来日し、文化交流や研究成果の発表、試食会などを行っています。(goal:10) 交流を通して相互理解を深めるとともに地域の特徴をどのように活かせば人を呼び込めるのかを考え、写真やSNSを活用した情報発信にも取り組んでいます。これらの活動をエコツーリズムにつなげ、継続的な地域活性化を目指しています。

今後は、大豆ミートソーセージを企業やムスリムの人々に販売し海外展開を進めていく予定です。また、タクシン大学と連携し蜂蜜を使用した石鯨などの商品開発にも取り組み、日本で販売するための架け橋となることを目標としています。

活動自体がまだ十分に知られていないため、421Lab. を中心に学校や地域、さまざまな人々を巻き込みながら活動を広げていきたいと考えています。

経済学部 1年 木村 美遥



全てのプロジェクト終了時に撮影



お互いの国の料理を作って食べる活動



タイのバッタルン地域の独特な方法での監染体験

# 地域と協働する文化観光プロジェクト

地域共生教育センター『北九州文化観光プロジェクト』



北九州文化観光プロジェクトは、これまで見落とされてきた地域の文化的資源や魅力を学生目線で発掘し、新しい文化観光プログラムの提案に向けたまちづくりプロジェクトで、2025年度は門司港および門司地区を中心に活動しています。

具体的な活動として、行政、事業者、地域住民の皆さんに協力いただきながらフィールド調査を行ない、活動の様子などをInstagramで情報発信を行っています。フィールド調査では、実際に地域に住んでいる人々や観光客に対してどのような点を持っているのかを知ることを重視しています。また、街を盛り上げようとするまちづくりの取り組みについて、地域の人々がどのように感じているのかを把握し、住んでいる人と自分たち外部の立場との考え方に違いに気づく機会になっています。

プロジェクトでは、これまで関わりのなかったメンバー同士でチームを構成し、活動が行われているため、方向性の違いや、それぞれの考えを共有しながらプロジェクトが進められています。こうした取り組みは、地域住民や関係者との協働を通じて持続可能な地域づくりを進めるものであり、SDGs 目標 11「住み続けられるまちづくりを」および、目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」に貢献しています。

本プロジェクトでは、文化観光まちづくりに向けた外部の立場と地域に住む人々との意識差などいろいろな課題はありますが、楽しく活動することを目標にしています。

経済学部 1年 佐々木 董子



門司港でのフィールドワーク



定例ミーティングの様子

# 交通と都市から地域を考える

## 地域創生学群「内田ゼミ」



内田ゼミでは、「交通（モビリティ）」と「都市」を主要な研究テーマとして、人々の交通行動や住みよい都市のあり方について研究を行っています。交通の変化が都市構造に与える影響や、都市のづくりが交通に及ぼす影響について、都市計画やまちづくりの観点から幅広く考えています。また、海外の先進的な交通政策や都市計画の事例を研究対象とすることもあり、海外研究者や JICA 九州を通じて来日する政策実務担当者との交流を通して、国際的な視野を養う機会もあります。(goal:9)

研究活動に加え、内田ゼミでは地域と連携した実践的なプロジェクトにも取り組んでいます。最近では、宮崎県都城市でフットパス活動を行い、地域の方々と共に町を歩きながらマップやコースづくりを進めています。(goal:11)

内田ゼミでは「楽しむこと」を大切にしており、ゼミ生は自由な発想で活発的に地域活動に参加しています。仲間と協力して活動することで、達成感やゼミへの帰属意識を高め、共に成長することを目指しています。(goal:17)

外国語学部 1年 清松 星煌



内田ゼミ①



内田ゼミ②

# 地域とつながり、ESDを身近にする 学生主体の実践

## 地域創生学群ESDプロモート実習



ESD プロモート実習では、「持続可能な社会を担う人材の育成」を目的、「ESD やSDGs へのハードルを下げることを」目標として、学生主体で学びと交流の場づくり (goal:4, goal:11) を進めています。月に一度実施する「ESD ツキイチの集い」では、昨年度まで知識中心の内容が多かったところから、今年度はより参加しやすい形式へとリニューアルしました。ESD を難しいものとして捉えず、気軽に関われるような企画づくりに力を入れています。

また、ふくし教育プログラムでは、市役所職員や企業の方々も参加し、講話とグループワークを組み合わせた学びの機会を提供しています。学生が実際の現場の声に触れ、地域課題を複合的に理解できる貴重な機会となっています。異なる立場の人々と交流すること (goal:17) で、多様な価値観を尊重する姿勢が育まれています。

さらに、北九州エコライフステージや未来ホテルデー、「好きっちゃ北九州」の活動などにも参加しており、地域イベントでの体験を通して、持続可能な行動 (goal:12) が特別なものではなく、日常の延長にあることを来場者へ伝えています。

誰もが参加しやすい場を学生が主導し、地域の人々と一緒に“できることから始める ESD とSDGs”を広げることが今後の目標としています。

経済学部 1年 濱中 亮臣



# 楽しく環境問題を学べる！ 地球環境カードゲーム「My Earth」

環境防災サークル北九大3Club



環境防災サークル北九大 3Club(以下、3Club)は地球環境カードゲーム「My Earth」の北九州響灘版の制作に携わり、My Earthを使った小学生向けのワークショップを北九州市内各地で開催しています。

My Earthとは地球を守る生態系チームと破壊する地球温暖化チームが地球の未来をかけて戦う小学生向けのトレーディングカードゲームで、2008年に慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの学生によって開発されました。3Clubが制作に携わったのは、北九州響灘の生態系や環境問題を取り上げた「My Earth 北九州響灘版」です。

北九州響灘版は響灘周辺の生態系や環境問題に興味や関心がわく工夫がなされています。(goal13,14) 具体的な特徴として、生態系チームのカードは響灘に生息する生き物で構成されていること、響灘での環境問題である「磯焼け」のカードがあること、さらには北九州の企業や団体がサポートカードになっていることが挙げられます。

今まで環境ミュージアムのイベントや山田緑地のフェスで My Earth のワークショップを出展しており、子どもたちをはじめ多くの方に My Earth を体験してもらいました。体験した子どもたちはゲームとして楽しみ、環境問題に興味を持ってもらえたそうです。

今後は、北九州の小学校の授業に My Earth を使ってもらうことを目標の1つに掲げています。(goal4) そのために My Earth の知名度を上げ、さらには My Earth のカードゲーム大会も開催したいとのこと。

国際環境工学部 2年 元村 光希  
国際環境工学研究科修士 1年 住田 葵



ルール説明・対戦相手役のメンバー



海の生き物と地球温暖化のカード



北九州響灘スタートパッケージ

# 「オリオンピック」による地域活性化

環境防災サークル北九大3Club



オリオンピックは「おバカ楽しむぞ!」をモットーに、折尾の賑わいづくりを目的として2016年に折尾駅・堀川周辺で始まったスポーツイベントです。

実行委員会は主に折尾周辺の大学の学生で構成され、競技内容の企画から会場調整、広報、当日の運営までを学生主体で担っています。北九大 3Club も実行委員会の一員として活動しています。

競技は、堀川でのカヌーを目玉に、石炭運びレースや人間カーリング、家事レース、立て缶崩しレースなど多彩で、どれもバカバカしく、思わず笑ってしまうような内容となっています。参加者は18歳以上と大人が対象で、毎年20チームほど(1チーム3~5人)参加し、会場には多くの声援と笑顔があふれています。イベントの収益金の一部は、ヘドロを分解する乳酸菌を埋設するための費用に充てられており、堀川の浄化活動という環境面からも地域に貢献するという側面も持っています。(goal:6,11)

学生は約6か月にわたる準備を通して、他大学の学生との連携や地域の方々との交流を深め、学校では得られない学びや、大学周辺の魅力を再発見できる取り組みとなっています。(goal:17) 令和7年には北九州市表彰を受賞し、今後さらに地域を盛り上げるイベントとして期待されています。

国際環境工学研究科修士 1年 住田 葵  
国際環境工学部 2年 元村 光希



当日の運営



堀川の浄化活動



室内競技「家事レース」

# 防災まちづくり「あそぼうさい」

環境防災サークル北九大3Club



「あそぼうさい」は、「遊ぼう」と「防災」を掛け合わせた、NPO 法人好きっちゃん北九州が行う防災啓発活動です。主に子どもを対象に、遊びを通して防災について楽しく学べるのが特徴です。北九州市内各地の市民センターで行われる子ども向け講座に組み込まれているほか、地域のイベントでも開催されています。活動では、非常口や避難所で見かけるマークを取り札にしたかるたや、緊急速報ダーツ、大雨前線ゴルフなど、さまざまなゲームを通して子供たちに防災の知識を教えています。(goal:4)

また、開催地域で想定される災害に合わせて内容が工夫されている点も特徴です。さらに、災害時には高齢者や障がいのある人など、さまざまな立場の人がいることや、避難の難しさについて学ぶことができます。子どもたちは楽しみながら積極的に参加し、振り返りの時間では大人以上に防災の知識を身につけていることもあります。この活動を通して、子どもたちが防災について学べると同時に、それを親や周りの大人に話すことで、大人も防災への理解が深まり、多世代で防災に取り組むきっかけとなっています。(goal:11,17)

総務省消防庁の「第29回防災まちづくり大賞 消防庁長官賞」を受賞するなど、全国的にも高く評価されている取り組みであり、地域に根ざした防災意識の向上に大きく貢献しています。

国際環境工学研究科修士1年 住田 葵  
国際環境工学部2年 元村 光希



ゲーム「森林伐採→土砂災害」



子供達に教えている様子



ゲーム「ダイバーシティカルタ」

## 食の日

ひびきのもったいないプロジェクト



「ひびきのもったいないプロジェクト」では、月に1回、第3水曜日に「食の日」を設けています。この日は「ひびきのもったいないプロジェクト」でお借りしている畑で収穫した野菜を用いてメンバーと一緒に調理し、出来上がった料理を楽しみながら、交流を行う場となっています。活動場所として、主にひびきの市民センターの調理室をお借りしています。

この活動は「ひびきのもったいないプロジェクト」の目指す学内の食の循環の最終地点にあたります。コンポストで生ごみを肥料化し、その肥料で育てた野菜を実際に調理して食べることで、活動の成果を実感し、メンバーの活動への意欲を高めることにもつながっています。

作る料理は季節によって異なり、夏はトマトやキュウリといった夏野菜を使ったサラダ、冬は大根やブロッコリーなどの冬野菜を使った鍋料理を作っています。しかし、現状では、畑で取れた野菜のみでこれらの料理をまかなうことは難しく、一部は市販の食材を使っています。

今後の目標は、「食の日」で使う食材を、畑で採れたものだけでまかなえるようになることです。畑の広さや収穫量の制約や活動に参加する人数などの理由から、すぐには実現できませんが、食循環の完成系として挑戦したいと考えています。

国際環境工学部1年 佐藤 壮一



メンバーと協力して調理



完成した料理

# 生ごみから肥料ができる!? コンポストで守る未来の環境

## ひびきのもったいないプロジェクト



このプロジェクトでは、週に二回（月・木）活動しており、活動内容はそれぞれ月曜日に食堂から出た生ごみなどの廃棄物を回収してコンポストにいれ、木曜日にメンテナンスを行っています。また、コンポストアドバイザーの方にもメンテナンスをお願いしており、合わせると週三回の活動を行っています。

コンポストは生ごみや落ち葉などの有機物を微生物の力で分解し栄養豊富な堆肥をつくる仕組みやそのための容器のことで、生ごみ削減と土壌改良を同時に行うことのできる環境に優しい循環システムです。これはごみの減量やエコ活動として注目されています。

このプロジェクトで行っているメンテナンス内容は水分調整をする、土と生ごみを十分に攪拌することです。微生物の働きで生じる熱によって分解が進むため、日常的に細かく温度調整をする必要はありません。そのため、メンテナンスを容易に行うことができます。このコンポストの活動は北九州市立大学のもったいないプロジェクトにつながる「学内食循環」の出発点の1つになっています。

現在までに行った活動としては、4月から10月の半年間かけて食堂からの廃棄物を入れたコンポストで作った肥料を畑に投入しました。この活動はSDGsの社会実装となり得る取り組みであると捉えており、特に目標13『気候変動に具体的な対策を』と目標15『陸の豊かさも守ろう』につながると考えています。



微生物に酸素を供給



日光にさらし、微生物の活動を促進

国際環境工学部1年 中尾 優里

# 肥料を抑えた野菜作り

## ひびきのもったいないプロジェクト



「ひびきのもったいないプロジェクト」は、毎週水曜日に八剣神社の敷地内にある畑をお借りし、野菜づくりを行っています。この活動は、化学肥料をできるだけ使わない環境にやさしい野菜作り(goal15)を目標に掲げています。目標達成に向けた工夫として、学内の食堂から出る生ごみを活用したコンポストによる堆肥を作り、畑に還元する取り組み(goal12)も進めています。

畑では季節ごとにさまざまな野菜を育てています。夏には、トマトやきゅうりなど、冬には大根やブロッコリーなど、旬の野菜を栽培し、自然の恵みを楽しんでいます。こうした活動は、単なる農作業にとどまらず、食の循環を体験できる学びの場としても機能しています。

また、この活動は「ひびきのもったいないプロジェクト」の目指す食の循環の中間地点にあたります。コンポストによる堆肥を使って野菜の栽培をすることで、環境にやさしい農業の難しさを理解し、問題を分析し解決策を考える力を養う機会になっています。

さらに今後は、畑づくりを通じて、「ひびきのもったいないプロジェクト」の活動の目的である学内循環の実現に加え、大学生と地域の方々とのつながりを深めることを目指しています(goal:17)。畑が大学生や地域住民を結ぶ交流の場となり、地域の活性化につながることを願っています。



畑の世話の様子



収穫した野菜

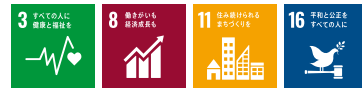


収穫まであと少し

国際環境工学部1年 佐藤 壮一

北九州市立大学の  
サステナビリティへのさまざまな取り組み

# 基盤教育センター提供科目とSDGs



基盤教育センターでは、基盤教育科目のシラバスにSDGsの各ゴールとの結びつきを明記するなど、SDGsを意識した教育活動を実施しています。

**基盤教育科目 SDGs関連科目 対照表(2025年度版)**

科目区分	授業科目名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
地域	都市と地域																	
地域	地域の社会と経済																	
地域	地域の文化と歴史																	
地域	地域の防災と防災																	
地域	地域防災への招待																	
地域	地域の達人																	
地域	北九州市の都市政策																	
地域	地域福祉論																	
地域	まちづくりの位置																	
地域	市民活動と地域																	
環境	環境特論A																	
環境	環境特論B																	
環境	環境都市としての北九州																	
環境	自然と人間																	
環境	人間と環境																	
環境	環境と生命																	
環境	環境問題概論																	
環境	持続可能な未来に向けて																	
環境	環境問題概論																	
環境	未来を創る環境技術																	
環境	環境ESD入門																	
環境	自然史へのいざない																	
国際(経済)	国際貿易入門																	
国際(経済)	現代の国際貿易																	
国際(経済)	現代貿易と文化																	
国際(経済)	現代社会と経済																	
知的経済	情報社会への招待																	
知的経済	社会学																	
知的経済	企業と社会																	
知的経済	現代正義論																	
知的経済	法学の世界																	
経済と経営	アカデミック・スタディーズ*																	
経済と経営	サービスマネジメント入門Ⅰ																	
経済と経営	サービスマネジメント入門Ⅱ																	
経済と経営	人権論																	
経済と経営	情報科学																	
経済と経営	教養セミナーⅠ*																	
経済と経営	教養セミナーⅡ*																	
ライフデザイン	ライフ・デザイン特論A																	
ライフデザイン	キャリア・デザイン																	
ライフデザイン	メンタル・ヘルズ*																	
ライフデザイン	メンタル・ヘルズ*																	
ライフデザイン	自己管理論																	
ライフデザイン	ライフ・デザイン特論A																	
ライフデザイン	ライフ・デザイン特論B																	
ライフデザイン	メンタル・ヘルズ*																	
ライフデザイン	自己管理論																	
ライフデザイン	アカデミック・スタディーズ*																	
ライフデザイン	サービスマネジメント入門Ⅰ																	
ライフデザイン	サービスマネジメント入門Ⅱ																	
ライフデザイン	人権論																	
ライフデザイン	情報科学																	
ライフデザイン	教養セミナーⅠ*																	
ライフデザイン	教養セミナーⅡ*																	
ライフデザイン	プロフェッショナルの仕事																	
ライフデザイン	企業・団体の問題解決																	

この表は、本学(北九州キャンパス)の学生全員が受講できる基盤教育科目のうち、シラバスにSDGsとの結びつきを明記している科目をまとめたものです。(※付いている科目は一部の担当者のみの担当です。)

**基盤教育科目 SDGs関連科目 対照表 (2025年度版)**

SDGs (エス・ディー・ジーズ) は「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称です。2015年9月に国連サミットで採択されたもので、世界共通の17の目標を掲げ2030年を期限に達成を目指すものです。

<p><b>1</b> 貧困をなくそう</p> <p>地域福祉論【地域】 環境特論A・B【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 社会学【創設】</p>	<p><b>2</b> 飢餓をなくそう</p> <p>環境特論A【環境】</p>	<p><b>3</b> 健康と福祉</p> <p>地域防災への招待【地域】 環境特論A【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】</p>	<p><b>4</b> 質の高い雇用を創出</p> <p>地域の文化と歴史【地域】 地域福祉論【地域】 環境特論A【環境】 自然と人間【環境】 地球の環境【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】 アカデミック・スタディーズ*【思考】 サービスマネジメント入門Ⅰ・Ⅱ【思考】 ジェンダー論【ライフ】 自己管理論【ライフ】</p>	<p><b>5</b> 性別平等</p> <p>地域防災への招待【地域】 環境特論A・B【環境】 環境ESD入門【環境】 現代の国際貿易【世界】 美学【創設】 教養セミナーⅡ*【思考】 ジェンダー論【ライフ】 自己管理論【ライフ】</p>	<p><b>6</b> きれいな水と衛生</p> <p>北九州市の都市政策【地域】 環境特論A【環境】 環境都市としての北九州【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】 企業と社会【創設】</p>
<p><b>7</b> エネルギーをみんなに そして安く</p> <p>環境特論A【環境】</p>	<p><b>8</b> 働きがいも 経済成長も</p> <p>地域の社会と経済【地域】 地域の文化と歴史【地域】 地域の社会と経済【地域】 北九州市の都市政策【地域】 環境特論A【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 現代社会と経済【世界】 情報社会への招待【技法】 企業と社会【創設】 教養セミナーⅠ*【思考】 ライフ・デザイン特論A【ライフ】 キャリア・デザイン【ライフ】 自己管理論【ライフ】 プロフェッショナルの仕事【ライフ】 企業・団体の問題解決【ライフ】</p>	<p><b>9</b> 産業と 雇用を創出</p> <p>働き方の未来【地域】 環境特論A【環境】 未来を創る環境技術【環境】 現代の国際貿易【世界】 現代社会と経済【世界】 情報社会への招待【技法】 ライフ・デザイン特論A【ライフ】 キャリア・デザイン【ライフ】 プロフェッショナルの仕事【ライフ】 企業・団体の問題解決【ライフ】</p>	<p><b>10</b> 人や国を超えて 公正で包摂的な成長を 実現</p> <p>環境特論A・B【環境】 環境都市としての北九州【環境】 自然と人間【環境】 現代社会と経済【世界】 現代正義論【創設】 法学の世界【創設】 サービスマネジメント入門Ⅰ・Ⅱ【思考】 人権論【思考】 ジェンダー論【ライフ】</p>	<p><b>11</b> 住み続けられる まちづくりを</p> <p>都市と地域【地域】 地域の社会と経済【地域】 地域の文化と歴史【地域】 地域の文化と歴史【世界】 現代社会と経済【世界】 北九州市の都市政策【地域】 地域福祉論【地域】 まちづくりの仕事【地域】 市民活動と地域【地域】 環境特論A【環境】 自然と人間【環境】 地球の環境【環境】 現代の国際貿易【世界】 自己管理論【ライフ】</p>	<p><b>12</b> つるむすび 消費を減らし、 生産を減らす</p> <p>環境特論A・B【環境】 環境都市としての北九州【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】 企業と社会【創設】</p>
<p><b>13</b> 気候変動に 適応する</p> <p>地域防災への招待【地域】 北九州市の都市政策【地域】 環境特論A【環境】 環境都市としての北九州【環境】 自然と人間【環境】 地球の環境【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】 自然史へのいざない【環境】 教養セミナーⅡ*【思考】</p>	<p><b>14</b> 海の豊かさ を増やす</p> <p>環境特論A・B【環境】 環境都市としての北九州【環境】 自然と人間【環境】 環境と生命【環境】 地球の環境【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 環境問題概論【環境】 環境ESD入門【環境】 自然史へのいざない【環境】</p>	<p><b>15</b> 陸の豊かさを 守りこぎ</p> <p>環境特論A・B【環境】 環境都市としての北九州【環境】 自然と人間【環境】 現代社会と経済【世界】 現代正義論【創設】 法学の世界【創設】 サービスマネジメント入門Ⅰ・Ⅱ【思考】 人権論【思考】 ジェンダー論【ライフ】</p>	<p><b>16</b> 公正で 包摂的な社会を 実現</p> <p>市民活動と地域【地域】 環境特論A・B【環境】 持続可能な未来に向けて【環境】 情報社会への招待【技法】 社会学【創設】 アカデミック・スタディーズ*【思考】 サービスマネジメント入門Ⅰ・Ⅱ【思考】 情報科学【思考】 教養セミナーⅡ*【思考】 世界での学び方【ライフ】</p>	<p><b>17</b> 平和と 公正な社会を 実現</p>	

本学(北九州キャンパス)の学生全員が受講できる基盤教育科目のうち、シラバスにSDGsとの結びつきを明記している科目をまとめたものです。(※付いている科目は一部の担当者のみの担当です。)

科目区分の略称: 地域【地域】、環境【環境】、国際【世界】、知的【技法】、経済【思考】、ライフ【ライフ】 (2025年度以降の入学が受講できる科目が対象)

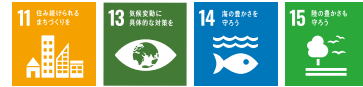
SDGsについて (国連開発計画):

北九州キャンパス×SDGs:

基盤教育センター:

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

# 副専攻「環境ESDプログラム」



学生が所属する学部等における専門分野を補完し、副専攻として環境教育を基軸に「持続可能な社会づくりに貢献できる人材」を育成するための学部横断型プログラムです。

## ■環境 ESD プログラムの創設

地球温暖化をはじめとする様々な環境問題が深刻化する中、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるよう、私たち一人ひとりに対して、価値観と行動の変革が求められています。本学は、「環境問題への取組といった北九州地域の特性を活かし、豊かな未来に向けた開拓精神に溢れる人材を育成していくこと」を教育理念の一つとして掲げています。この理念のもと、北方キャンパスの各学部・学群で学ぶ学生の皆さんを対象として、環境教育を基軸に、持続可能な社会づくりに貢献できる人材を養成していくための教育プログラム「環境 ESD プログラム」を創設しました。

## ■環境 ESD プログラムの特色

- ・ 環境に関する幅広い知識を学ぶ
- ・ 実体験を通して学ぶ
- ・ 環境未来都市を目指す北九州市を学ぶ

## ■履修要件

対象学部・学群／外国語学部、経済学部、文学部、法学部、地域創生学群

申請条件／新2年生で1年時の累積 GPA が 2.0 以上の学生、新3年生で2年時の累積 GPA が 2.0 以上の学生

申請時期／1年次末、2年次末(3月初旬)

募集定員／40名(上回った場合は選考します)

所属する学科・学類の卒業資格を満たし、かつ、環境 ESD プログラムの修了要件単位数を修得すれば、本プログラムの修了が認定され、卒業時に「学位記」に加え、「副専攻修了証書」が本学から授与されます。

## ■授業科目と環境 ESD プログラム修了に必要な単位数について

環境 ESD プログラムの修了には提供授業科目から 22 単位が必要になりますが、そのうち 14 単位までは卒業単位に含まれる各学科・学類で通常の履修登録が可能な科目を充当できますので、それ以外から 4 科目(8 単位)以上を修得すれば副専攻修了が認められます。



# 社会人教育におけるSDGsの推進 i-Designコミュニティカレッジ



本学では大学が持つ「知」の資源を生かし、人生の実りの創出と、それによってもたらされる地域社会の持続可能な発展を目的とした社会人教育を行っています。社会人が新しい学びを通じて自己を再デザインする場です。地域や社会との関係性を深め、リーダーやコーディネーターとして活躍する力を養成します。

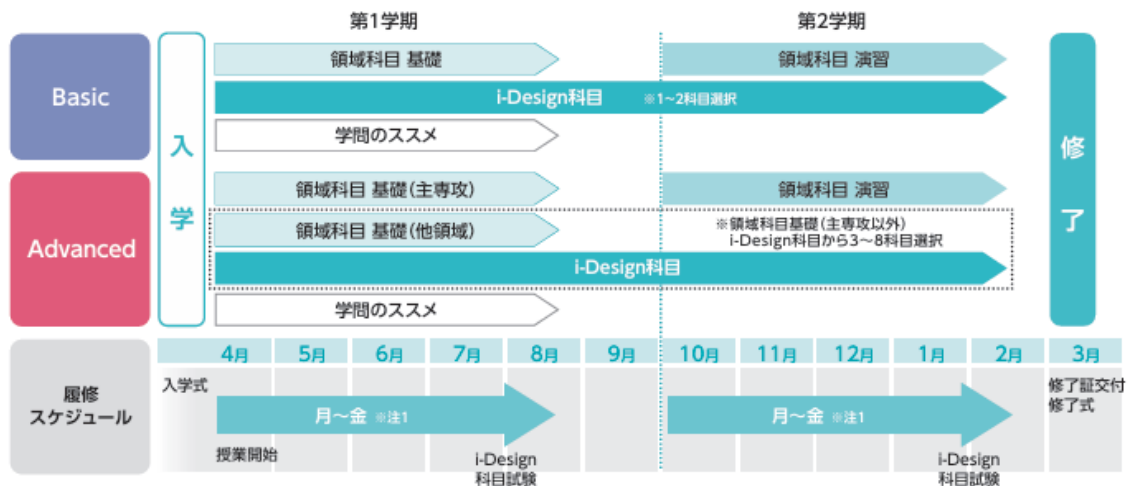
・5つの領域

プログラム	領域	募集人数	履修科目		
			必修科目	選択科目	
				i-Design 科目	その他
Basic プログラム	地域創生	60名	・領域科目基礎 1科目(第1学期)  ・領域科目演習 1科目(第2学期)	1~2科目選択*2	学問の スズメ (選択)
	こころの科学*1				
	多様な世界との対話				
	社会人のための データサイエンス基礎				
人生の記憶と記録					
Advanced プログラム	地域創生			3~8科目選択*3	
	こころの科学*1				
	多様な世界との対話				
	人生の記憶と記録				

\*1「こころの科学」領域は、昼クラス及び夜クラスを開講。ただし、昼クラスと夜クラスをまたがっての受講はできません。

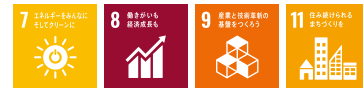
## 履修の流れ

専攻を1領域選択し、その分野を追究していく **Basicプログラム** と、  
主専攻に加え、他の領域やより多くの分野の多彩な講義を履修できる **Advancedプログラム** の2つを設けています。  
(「社会人のためのデータサイエンス基礎」領域はBasicプログラムのみとなります。)



※注1 「社会人のためのデータサイエンス基礎」領域は原則オンデマンドとなります。

# 環境志向エンジニア教育



国際環境工学部の初年次科目「未来を創る環境技術」、「環境問題特別講義」、「環境問題事例研究」では、企業と共同したSDGs導入教育を通して、エンジニアの視点から地域社会の持続可能性を考えられる人材を育成しています。

## 北九州市立大学 環境志向エンジニア教育

### ◆国際環境工学部の取組み事例

#### 環境志向エンジニア教育の新しい挑戦

環境技術研究所の研究を大学教育の出口（**未来**）とみなし、初年次教育（**現在**）に**バックキャスト**ング



#### 課外活動

**未来地域産業  
インターンシップ実施**  
\* 1年生の夏休みを利用して  
地域企業へ

インターンシップ先企業は  
テーマを設定  
\* SDGs目標7・8・9・11の  
いずれかで設定  
企業活動の体験を通して  
社会課題を実感

「環境問題事例研究」  
の課題として取組む

# 地域戦略研究所の取組み



様々な情報技術を、IOT を用いた応用体系の中で社会実装ができる人材育成を目的とした社会人教育です。

北九州市立大学地域戦略研究所 (RISS) は、地域社会部門・SDGs 推進部門・アジア地域連携部門の三位一体で、調査研究・企業支援・人材育成を通じて「環境と経済の両立」を掲げる北九州の持続可能性に取り組む大学附置のシンクタンクです。概説として、地域課題の調査と政策提言、企業の SDGs 実装支援、アジアとの連携を体系化しているのが大きな特徴です。

近年の具体プロジェクトでは、洋上風力産業の人材育成プログラムの拡充・高度化、ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス (ZEH) 移行促進と社会実装など、脱炭素に直結するテーマが並び、北九州市の SDGs 関連意識の経年調査、高校生ヤングケアラー実態調査、外国人材活躍モデルの検討等、包摂的社会の基盤づくりにも踏み込んでいます。さらに、地域の文化・スポーツイベントやポップカルチャーの経済効果を測定し、持続可能な賑わいの創出を定量的に支える調査も実施しています。

所属教員の研究領域は多彩で、都市政策・地域活性化、災害時に大学が果たす役割、スポーツを核としたまちづくり、アジアの職業教育・産業人材育成、中小企業支援、SDGs 認知度の経年変化を分析、地域共生・福祉分野の包摂と排除、防災教育・人材育成など多岐にわたります。

企業支援では、北九州・京築の中小企業の SDGs 実装状況を追跡し、日本と英国の中小企業の取り組みを比較して、脱炭素・人材活用の実務的課題を浮き彫りにしています (紀要第 10 号)。こうした研究・支援・人材育成を核に、地域戦略研究所は市民・企業・行政の協働を促進し、エビデンスに基づく政策設計と社会実装を加速させることで、地域のサステナビリティを多面的に前進させています。



# 環境技術研究所の取組み



北九州市立大学環境技術研究所は、地域と世界の持続可能性を両立する研究拠点として、エネルギー、資源循環、水環境、情報技術の4分野を軸に活動しています。

・組織図



エネルギー・カーボンニュートラルでは、再生可能エネルギーの大量導入を見据えた需給調整技術や、ゼロエネルギー街区の実証を推進。城野地区では ZEH 住宅や水素エネルギー管理を組み合わせて、低炭素都市モデルを構築しています。

資源循環・リサイクル分野では、食品残渣やバイオエタノール排水を利用したメタン発酵、廃棄物由来粉体を活用した低炭素コンクリートの開発を進めています。また、LCA や物質フロー分析を用いて、都市や産業の循環構造を評価し、政策提言に活かしています。

水環境技術は、FO 膜や嫌気性微生物を組み合わせた省エネ型下水処理システムの開発、有害化学物質除去評価、バイオセンサー応用等を通じて水質改善に貢献しています。

さらに、情報技術・AI を活用し、エネルギー政策支援や分散型環境モニタリングのための群ロボット技術を研究。これにより、スマートな都市管理を目指しています。

研究所は産学官連携や国際協力にも積極的で、ゼロカーボン都市の実証、洋上風力キャンプ、アジア諸国への技術移転などを展開。こうした活動は、北九州市が環境先進都市として国内外で果たす役割を強化し、持続可能な社会の実現に大きく寄与しています。



# 国連アカデミック・インパクトへの加盟



本学は、2019年7月に国連アカデミック・インパクト（UN Academic Impact）に加盟しました。アカデミック・インパクトは、国際連合と世界の大学（高等教育機関）とを結ぶパートナーシップであり、「人権、識字能力、持続可能性、紛争解決」の分野における普遍的な10の原則を定め、参加大学には、これらを積極的にサポートする活動が求められています。本学では、10の原則のうち、特に原則4・6・8・9・10に取り組み、SDGs達成への取組を始めとした教育研究活動の発展・充実に努めます。

## アカデミック・インパクトが定める10原則

原則1：国連憲章の原則を推進し、実現する

原則2：探求、意見、演説の自由を認める

原則3：性別、人種、宗教、民族を問わず、全ての人に教育の機会を提供する

原則4：高等教育に必要とされるスキル、知識を習得する機会を全ての人に提供する

原則5：世界各国の高等教育制度において、能力を育成する

原則6：人々の国際市民としての意識を高める

原則7：平和、紛争解決を促す

原則8：貧困問題に取り組む

原則9：持続可能性を推進する

原則10：異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く



# SDG大学連携プラットフォーム (SDG-UP)への加入



「SDG 大学連携プラットフォーム」は、国際連合大学が中心となり、SDGs を軸に、国内の大学の連携を強化し、ステークホルダーとの協働を通して国際社会における日本の大学の存在感を高め、日本及び世界の持続可能な発展に貢献することを目指しています。

2020年8月に開催された「SDG 大学連携プラットフォーム設立記念シンポジウム」では、松尾学長がパネリストとして登壇して、大学がSDGsに取り組む意義や、より良い社会づくりのための大学のあり方などについて議論を交わしました。

## ・SDG-UP 設立の目的 ※SDG-UP Web サイトより

国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) は、SDGs の達成に向けて積極的に取り組む意欲のある日本の大学が連携できる場として、「国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」を2020年に設立しました。ここでは、国連大学と日本の大学同士が連携し、高等教育におけるSDGsの取り組みや人財育成、ステークホルダーとのパートナーシップを強化し、日本と世界の持続可能な発展に貢献することを目的としています。SDG-UPの活動は、よりレジリエントな社会の実現に向けて、高等教育に関わるステークホルダーの行動変容を促し、すべての人にとってより持続可能な未来を確保するため、個人が自ら行動することを支援します。

## ・SDG-UP の概要

SDG-UP への参加に関しては、地域的なバランス・規模・タイプ・専門性の観点から多様性を重視し、28大学により取り組みを開始しました。初年度は6つのワークショップをオンラインとハイブリッド形式で開催し、参加大学のSDGsに関わる取り組みが共有されました。また、Times Higher Education Impact Ranking および Yale Sustainability Initiatives などの専門家を特別講師として迎え、外部評価の重要性に関する議論が行われました。国際的に活躍する専門家と直接対話し、日本の大学の代表者がSDGsを取り巻くさまざまなテーマについて議論できることも本プラットフォームの魅力です。初年度の2021年3月に開催されたセッションでは、「SDGs カリキュラム」、「マネジメント」、「ファイナンス」、「アカウンタビリティと外部評価」の4つのテーマで総合討論を実施し、提言をまとめました。プロジェクトの2年目では、この4つの提言の具現化に向けて積極的に取り組んでいきます。



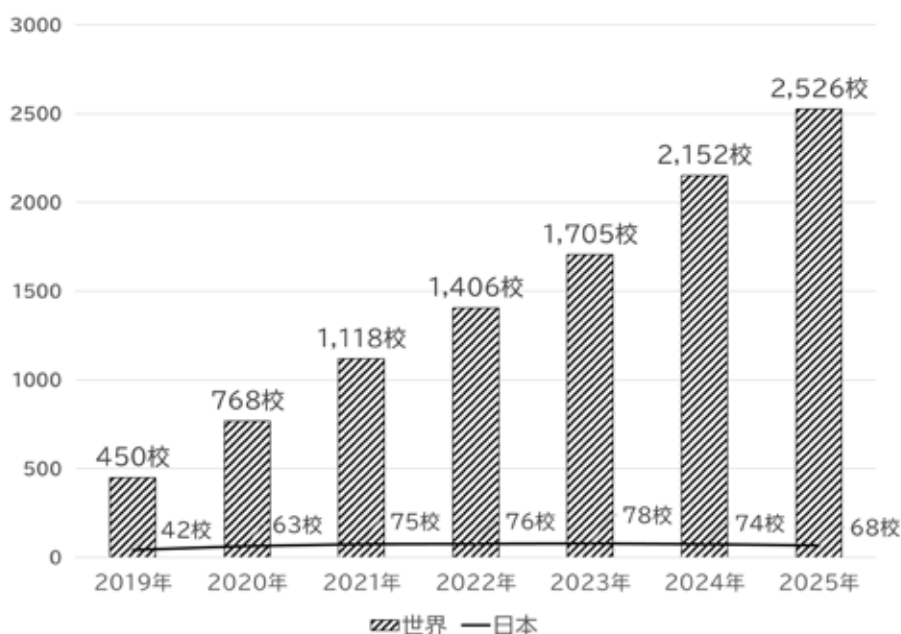
# THEインパクトランキングの概要と北九州市立大学の位置づけ

法学部  
准教授 高木 超

## THE インパクトランキングに関する国内外の動向

本稿で扱う THE インパクトランキングとは、イギリスの教育専門誌『Times Higher Education (THE)』が、国連の「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs)」に準じて開発した枠組みを用いて、世界各国の大学を対象に独自に評価を行い、ランキング化したものを指す。2019年に始まった同ランキングの参加大学数は、開始年の450校(2019年)から768校(2020年)、1,118校(2021年)、1,406校(2022年)、1,705校(2023年)、2,152校(2024年)と右肩上がりに増加し、2025年には世界130カ国・地域の2,526校を評価している(図1)。

図1 THE インパクトランキング参加校数の推移



出所：各年の「University Impact Rankings」をもとに筆者作成<sup>1</sup>

THE インパクトランキング 2025 において、総合部門で世界の上位に位置付けられている大学の顔ぶれを見ると、1位が Western Sydney University (オーストラリア)、2位が Western Sydney University (イギリス) と続き、3位の Kyungpook National University (韓国) がアジアの最上位である。日本の大学で最上位は北海道大学の44位で、その後は101位～200位の間に、広島大学、九州大学、大阪大学、東北大学が位置している。

<sup>1</sup> Times Higher Education ウェブサイト「University Impact Rankings 2025」から引用  
< <https://www.timeshighereducation.com/impactrankings> > 2025.12.24 最終閲覧

これらの先行する大学の中でも、特に北海道大学が6年連続で国内1位を維持しており、同大学におけるサステナビリティの推進を学内外に印象付けていると言える。

日本国内の THE インパクトランキングの参加校数は、2023 年の 78 校が最多で、ここ数年は若干減少しているが、前述の北海道大学以外の大学も、ランキングの結果を大学のウェブサイトで広報するなど、その関心が薄れた訳ではないだろう。

### 北九州市立大学の取り組みと今後の課題

北九州市立大学は 2020 年から 2023 年の 4 年にわたって THE インパクトランキングにエントリーしており、2020 年は 401-600 位に位置していたが、ランキングの参加大学数の増加に伴い、順位は 2022 年以降、1001 位以下に位置付けられている(表 1)。

表 1 北九州市立大学のインパクトランキングの実績<sup>2</sup>

	2023 年	2022 年	2021 年	2020 年
総合	1001 位以下	1001 位以下	601-800 位	401-600 位
目標 1	601-800 位	601 位以下	401 位以下	301 位以下
目標 2	601 位以下	401 位以下	301-400 位	201 位以下
目標 3	1001 位以下	801-1000 位	601-800 位	401-600 位
目標 4	1001 位以下	1001 位以下	801 位以下	401-600 位
目標 5	801-1000 位	801 位以下	601 位以下	401 位以下
目標 6	401-600 位	401-600 位	301-400 位	101-200 位
目標 7	601-800 位	401-600 位	401 位以下	201-300 位
目標 8	401-600 位	601-800 位	401-600 位	201-300 位
目標 9	601-800 位	601 位以下	401-600 位	401 位以下
目標 10	601-800 位	601 位以下	401-600 位	301-400 位
目標 11	601-800 位	601 位以下	401-600 位	301-400 位
目標 12	401-600 位	301-400 位	301-400 位	201-300 位
目標 13	601 位以下	601 位以下	401 位以下	301 位以下
目標 14	401 位以下	401 位以下	301 位以下	201 位以下
目標 15	401 位以下	401 位以下	301-400 位	201 位以下
目標 16	301-400 位	401-600 位	301-400 位	301-400 位
目標 17	801-1000 位	801-1000 位	601-800 位	601 位以下

出所：各年の「University Impact Rankings」をもとに筆者作成

世界全体では、既に 2500 を超える参加大学が見られる状況から、北九州市立大学が総合ランキングの上位を狙うには、一定の時間を要すると考えられる。他方で、大学 THE インパクトランキングは SDGs の 17 ある目標ごとのランキングも公表しているため、重点目標を設定し、その推進を切り口として、他の目標を推進するよう波及させていくことも選択肢と言えるはずだ。

<sup>2</sup> 上位の機関については正確な順位と総合スコアが表示されるが、それ以外は帯状順位 (banded ranks) の表示に留まるため、本表も同様の表示とする。

## 活動する学生からのメッセージ

私は、地域共生教育センター（通称：421Lab.）の「KITAQ キャンパスSDGs」に所属しています。このプロジェクトでは、SDGsの観点から学内の課題を探し、企業や学内関係者の方々にご協力いただきながら、学生が主体となって課題解決に取り組んでいます。SDGsは、現代社会のあらゆる分野に関わる重要な課題です。たとえ成果がすぐに見えないとしても、小さな行動の積み重ねが、人や環境を支える大きな力へつながると考えています。

私は、SDGsの観点から社会に貢献したいと考え、このプロジェクトに参加しました。しかし、1年生の後期以降、メンバーは私を含めた1年生3人だけとなり、右も左もわからない状態での活動は、試行錯誤の連続でした。多くの方々に支えていただいたおかげで、今年度は新たなメンバーも加わり、活動の幅が大きく広がりました。学内でのSDGs文化の醸成にとどまらず、学外でのワークショップ開催や環境イベントへの参加など、多くの方々と連携した新たな活動に数多く挑戦することができました。

また、活動を通じて見えてきた課題は、知識を行動に変えることの難しさです。問題の存在を知っているだけでは、行動にはなかなか結びつかないという現実は何度も直面しました。自分にとって直接的な利益が見えにくいと、行動に踏み出しにくいという壁を越えるために、単なる情報提供だけでなく、共感や行動を促す仕掛けづくりにも力を入れていきたいと考えています。今後も、学生だからこそできる挑戦を続け、多様な人々と関わりながら、持続可能な社会づくりに貢献していきたいと思いをします。

法学部2年 林 優里



食品受け渡しの様子



フードバンクから提供された食品

私は、421Lab.の「北九大もったいないプロジェクト」に所属しています。このプロジェクトでは、大学の中に潜んでいる「もったいない」を見つけ出し、学生で解決策を考えて実践しています。

私が特に力を入れている活動は、リサイクル容器の回収です。大学内で販売されているお弁当の中にはリサイクル可能なものがあるのに、その容器がごみとして捨てられてしまうのは「もったいない」と感じ、この活動に取り組んでいます。また、この容器には10円のデポジットがあり、なにか有効活用できないのかと考え、昨年回収した容器を換金して子ども食堂に寄付する活動を始めました。こうすることで、リサイクルに関心がない人にも「自分の行動が誰かの役に立つかもしれない」と、回収に協力してもらいやすくなると思ったからです。

この活動で、昨年は14,400円を寄付することができました。しかし、容器の回収率はまだまだ10%以下です。今後は、リサイクル容器をごみとして捨ててしまう人の理由を調査し、結果をもとに解決策を考え、回収率を上げていきたいです。またその際に、この活動に関わる人が元気になれたり、笑顔になれたり、楽しめたりするようなものになりたいと考えています。そうすることで、環境問題に関心がなかった人も巻き込んで、より多くの人にリサイクル容器の存在を知ってもらうことができると考えています。

文学部3年 大塚 菜生



リサイクルの手順をかけたボード



寄付先の子ども食堂で工作



設置している回収ボックス

## 活動する学生からのメッセージ

私は、一般社団法人北九州市立大学同窓会の助成金を活用し、オリジナル商品「北九大ショコラコレクション」の開発に取り組みました。本校には大学らしいおみやげがなく、帰省の際に家族や友人へ渡したり、学校訪問時に来学者へ紹介したりできる商品があれば、より大学に親しみを持ってもらえるのではないかと考えたことがこの企画の出発点です。

商品開発では「本校らしさ」をいかに表現するかを最も重視しました。チョコレートの北方キャンパス、ひびきのキャンパス、大学ロゴ、大学ビジョンロゴの4種類のデザインにより、大学の象徴的要素を込めました。また、箱パッケージには小倉外事専門学校としての歴史を感じられる建物のデザインを採用し、本校ロゴの青色を基調とすることで、統一感のある商品として仕上げました。歴史と現代性を併せ持つデザインとすることで、在学生、卒業生、来学者など幅広い方々に「北九大らしさ」を感じてもらえることを目指しました。

発注の際には、助成金の範囲内でどのくらい商品を作ることができるかを検討して数量を決定しました。今回の取り組みでは、企画立案からデザイン検討、数量調整まで、ものづくりの実務的な流れを経験できたことが大きな成果となりました。

将来的には「北九大ショコラコレクション」が大学を象徴する商品として広まることを期待しています。今回の経験を通して得た学びを活かし、今後も大学と地域をつなぐ企画づくりに挑戦していきたいです。

国際環境工学部3年 祖田 来夏



北九大を象徴するチョコレート



北九大ショコラコレクション

母国語以外で歌うカラオケ大会 一般社団法人 北九州市立大学同窓会  
学生応援プロジェクト『夢に向かって～チャレンジGOGO!』での取り組み

ひびきの地区のみなさんやカラオケに興味がある人、留学生や北九州市立大学生など様々な人を集めてカラオケ大会を行いました。

私自身、英語が苦手な中で公衆の場で話すことが苦手でした。このような悩みを抱えている学生や英語を使う場面を抱えた社会人の話を耳にしました。また留学生もせっかく日本に留学してきたのにあまり日本人と接する機会を得られていないという現状がありました。これらの理由により母国語以外で話すイベントをしようと考えました。それだけではイベントとしてのインパクトが小さいので、私が依存症と言われるくらい好きなカラオケと絡めて「母国語以外で歌うカラオケ大会」を北九州市立大学同窓会学生応援プロジェクトで行うことにしました。

早稲田大学院や北九州市立大学の留学生や学生、遠くからは広島から参加していただき年齢で言うと10代から70代まで幅広く、累計16組が参加していただいたこと、またゴリけんさんというニックネームをはじめワタナベエンターテインメントの皆さんをおよびできたことにより楽しめるイベントの時間を作ることができたこと、みなさんから「楽しかった」「よかったです来年もやっていただきたい」といってもらえたこと、これらの3点は成果と言えるでしょう。それに対して課題としてはお客さんの人が集まらず延べ50人いかないくらいでした。ポスター広告やSNS宣伝に力は入れましたが足らなかつたと感じました。

国際環境工学部3年 井上 瑛達



## カーボンニュートラル社会実現に向けた研究、教育活動

経済学部  
教授 牛房 義明

私は環境経済学、エネルギー経済学を軸に（行動経済学、因果推論、機械学習等の手法も活用）、地域の脱炭素と持続的成長を両立させるサステナビリティの研究・教育に取り組んでいます。研究では、洋上風力に関する社会的受容、ネットゼロエネルギーハウス普及のためのフィールド実験などを行っています。洋上風力に関する社会的受容の研究では、人々が洋上風力を導入する際にどのようなことに懸念があるかを明らかにし、地域に受け入れられる洋上風力発電事業のあり方について研究しています。ネットゼロエネルギーハウスに関する研究では、ナッジ(行動経済学の知見の一つ)を利用して、人々がどれだけエネルギーの使用量を減らすことができるのかを明らかにしています。

教育では、これらの研究成果を踏まえた講義やセミナーを定期的を実施しています。洋上風力に関しては、地域社会に受け入れられ、また事業として成り立つための洋上風力発電事業のあり方について、学生や社会人を対象に講義を行っています。また、ネットゼロエネルギーハウスに関しては、地域住民を対象に環境や家計にやさしい、賢いエネルギーの使い方についての情報提供を行っています。



洋上風力キャンプにおける現地視察の様子



賢いエネルギーの使い方に関する説明の様子

## 活動する教員からのメッセージ

# 地域防災への取組み

地域共生教育センター  
准教授 村江 史年

「災害は忘れた頃にやってくる。」と言われるが、私自身は忘れた頃というよりも、人の気が緩む瞬間にやってくるのだと痛感した。2024年の元旦に発生した能登半島地震では、震度7を記録し、現時点で670名(災害関連死含む)を超す人が亡くなっている。お正月と言えば、家族団欒で過ごしたり、休暇をとって故郷を訪ねたりと多くの人が禍のことなど忘れ、ひと時の安息を覚える瞬間である。まるで、そうしたタイミングを推し量ったかのように大地震が能登半島を襲った。さらに、同年の9月には能登半島豪雨も発生した。一度ならず二度までも同じ地域を自然災害が襲うなど誰が予想できたであろうか。自然災害の激甚化・頻発化が予見される中で、いかに災害を自分事として考えるかが問われている。

能登半島地震以降、日本ソーシャルワーク教育学校連盟からの派遣依頼を受けて、7回にわたり被災地支援の活動に従事してきた。そのうち、5回については、421Lab. に所属するKITAQ<sup>∞</sup>『絆』復興応援プロジェクトの学生たちと協同して活動を行ってきた。以下は、これまでの支援活動の経年変化と今年度の取組みについて報告をする。

### 1) 災害ボランティアセンターでの運営支援と災害ボランティア活動

発災後からおおよそ半年までの期間は、社会福祉協議会が運営する災害ボランティアセンターやNPOや任意団体等が主体となる災害支援活動に参加をして、主に家財の片づけや瓦礫の除去を行った。また、同年に起きた能登半島豪雨災害によって復旧途中の地域が再び被災をしてしまい、さらに被害が拡大した地域もあった。豪雨災害以降は、土砂の撤去を中心に活動を行ってきた。

### 2) 家財の整理と仮設住宅への引越支援

発災から半年程度が経過した頃から、徐々に仮設住宅への引越し作業やそれに伴う家財の整理といった活動に携わる機会が増えた。一見すると破棄すると思われるようなものでは、当事者からすると思い入れのあるものだったりする。たんに荷物を整理するのではなく、被災者に寄り添い心の整理を手助けすることの大切さを痛感した。

### 3) 仮設住宅でのコミュニティ形成支援

発災から1年が経過した後は、主に仮設住宅での支援を行った。北九州の名物の焼うどんと能登の名産である牡蠣やいしり(魚醤)を使った絆焼うどんを住民の皆さんに食べていただいた。今年度は3つの仮設団地で焼うどんの炊き出し支援を行った。また、遠隔地にいながら支援を継続するために、能登の産物を北九州市内で開催された祭やイベント等で販売することで、その売り上げを能登に還元する活動も行った。



家財の片づけを手伝う様子



仮設住宅を訪問する様子

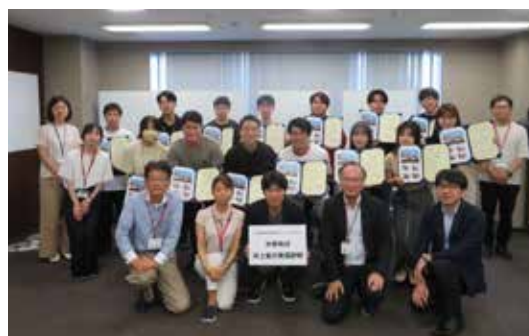
## 地域から世界の脱炭素へ 洋上風力キャンプの成果と意義（2025）

国際環境工学部  
教授 井上 浩一

「北九州市洋上風力キャンプ×SDGs」大学生向け洋上風力発電研修（主催：北九州市、共催：北九州市立大学）が、2025年8月25日から29日に北九州市立大学小倉サテライトキャンパスで開催されました。本研修は、2050年ゼロカーボンシティの実現と風力発電関連産業の総合拠点を目指す北九州市と大学による人材育成プログラムであり、2022年度の開始以来4回目となる今回は、全国の大学・大学院から15名（本学9名）が参加しました。

国内における洋上風力発電の本格的導入は、エネルギー転換だけでなく、地域社会や産業構造にも大きな影響をもたらします。その推進には、風力発電技術だけでなく環境・地域共生・制度設計などを横断的に理解し、新たな価値を共創できる人材が不可欠です。本研修では、専門家による講義や風車・工場見学に加え、グループワークを通じた実践的な学びを重視しました。今年度のグループワークでは、北九州市沖を想定した洋上風力発電事業計画の策定をテーマとした検討を行い、研修最終日の成果報告会でグループ発表をしました。

本学は、国内の関係大学・事業者で構成される産学連携洋上風力人材育成コンソーシアム（IACOW）に参画しており、学修機会の創出と社会課題解決型教育を推進しています。今後も、洋上風力発電分野における産学官連携を通じた教育・研究活動を一層発展させ、持続可能な社会の実現を支える専門人材の育成に貢献していきます。



## 環境技術研究所「先制医療工学研究センター」の取組紹介

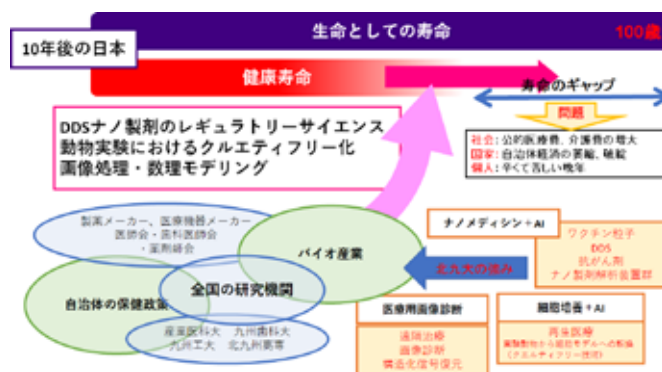
環境技術研究所

中澤 浩二

「環境技術研究所」では、重点的に進める研究開発の方向性を戦略的に定めており、現在、ゼロカーボンシティ（都市エネルギーマネジメント研究、低炭素コンクリート技術研究）、災害に強いまちづくり（災害対策技術研究）、長寿健康社会（先制医療工学研究、シニアライフ技術研究）、新産業創出（国際光合成産業化研究）、データサイエンス技術（AI・予測技術研究）に関する7つの研究センター・技術開発センターが設置されている。これらのセンターは各領域に特化した研究開発を推進するばかりでなく、領域横断的な融合技術の研究開発も積極的に取り組んでいる（下記 HP 参照）。

本稿で紹介する「先制医療工学研究センター」は、約10年の歴史を持つ常設センターであり、生命寿命と健康寿命のギャップを縮め、高齢化社会を明るい長寿社会を実現するための技術開発を目指している（下図）。この実現には、①治療から予防・予測へと発想を転換した医療、②若年層や中高年層の保健政策や予防・予測医療、③生物が本来持っている免疫能や自己修復能の強化などのような「先制医療」と呼ばれるが取り組みが必要であり、健康維持やそのサポート技術を通じてリスク因子をできるだけ早く解消・低減することが極めて重要である。

設立当初の本センターは、患部に薬剤を効率的に届ける薬物送達システムに関する技術開発が中心であったが、その後、生命科学系、材料化学系、生命情報系などをそれぞれ専門とする多くの先生方の参画により、今ではナノメディシン、再生医療、生体適合性材料、ゲノム解析、画像診断解析などに関する技術開発の研究を活発に進めている。また、本領域はデータサイエンス技術との相性が大変よく、生命現象の理解・解析・予測のために情報処理技術の融合にも取り組んでいる。さらに、本学の保有技術を基盤として、近隣の産業医科大学や九州歯科大学との医歯工連携の取り組みも進めている。これらの技術をさらに発展させることで持続可能な社会づくりへと貢献していきたい。



参照：環境技術研究所 HP (<https://office.env.kitakyu-u.ac.jp/kangiken/>)

# 北九州市立大学 4つのビジョン

---

本学は、創立 80 周年を目前に迎えるにあたり、地方公立大学としての役割と使命を深化させるために、以下の 4 つのビジョンを策定しました。これらは、地域・環境・国際・情報を軸に据え、教育・研究・社会貢献の諸領域における戦略の指針となっています。

## 1. 地域と歩む (Local)

「地域と歩む」というビジョンは、北九州市全域を“大学のキャンパス”と位置づけ、学生・教職員が地域社会とともに課題解決に取り組む姿勢を指します。

- ・地域共生教育センターの設置により、実践的地域プロジェクトを推進
- ・学外フィールドワークや地域出身者の地元就職支援に力を入れ、市民から信頼される大学を目指しています

## 2. 環境を育む (Ecological)

「環境を育む」ビジョンは、SDGs 未来都市に選定された北九州市と連携し、環境共生社会構築に貢献する意志を示しています。

- ・国際環境工学部において、初年次から「環境問題事例研究」などの教育を実施し、環境課題への理解と実践を深めています
- ・公害克服の歴史と技術力を活かし、再生可能エネルギーや資源循環などの研究・地域連携を進め、持続可能な社会への道筋を示します

## 3. 世界（地球）とつながる (Global)

本学は「世界（地球）とつながる」を通じてグローバル人材の育成を強化します。

- ・海外 48 大学・1 研究機関との学術協定による留学・交流プログラムを拡充し、コミュニケーション能力や国際感覚の獲得を目指しています
- ・少人数クラスによる語学教育を通じ、異文化理解と課題発見・解決能力を養います

## 4. 情報で創る (Information)

「情報で創る」は、デジタル社会において新たな価値を創出し、地域・社会の課題を情報技術で解決する力を重視したビジョンです。

- ・2027 年開設予定の「情報イノベーション学部（仮称・設置構想中）」をはじめ、数理・データサイエンス・AI 教育プログラムを導入し、実社会でのデータ活用スキルを育成します
- ・アクティブラーニングを取り入れた教育改革や IR (Institutional Research) に基づく教育アセスメントにより、質の高い情報教育環境を整備します

# 北九州市立大学 学部・学科

---

## 外国語学部

- ・英米学科
- ・中国学科
- ・国際関係学科

## 経済学部

- ・経済学科
- ・経営情報学科

## 文学部

- ・比較文化学科
- ・人間関係学科

## 法学部

- ・法律学科
- ・政策科学科

## 国際環境工学部（ひびきのキャンパス）

- ・環境化学工学科
- ・機械システム工学科
- ・情報システム工学科
- ・建築デザイン学科
- ・生命工学科

## 地域創生学群

- ・地域創生学類

## 情報イノベーション学部（2027年新設予定）

- ・情報エンジニアリング学科
- ・共創社会システム学科

## 大学院研究科

- ・法学研究科
- ・社会システム研究科
- ・国際環境工学研究科
- ・マネジメント研究科（専門職学位）